

第40回 (昭和43年3月17日)

大村湾 箕島・臼島・ガロウ島の地質 (マップ2万5千分の1 大村)

山本寿一 (理科教育センター)

上下のバスから大村裁判所前停留所に下車した会員の方々と地元勢は、5分程で波止場に到着。10時にチャーターした渡海船に乗り込み島めぐりである。早春の潮風はまだ冷たいが、船上では楽しそうなしゃいだ気持が溢れている。20分で箕島の南端小泊に到着。

箕島は周囲7km、100m以下のほとんど玄武岩が被覆している平坦な台地性の島であるが、海岸線は岩石・地質・地形的に変化に富んだ地域で、本日の巡検は島の南半分である。以下特徴ある地点について記載したい。

(1) 小泊南西部は肉眼的には含青白色の粗粒岩で、1cm大の斜長石の斑晶が目立ち、輝石の斑晶もかなり含まれている。鏡下では充填組織をしめし、普通輝石・紫蘇輝石・橄欖石の斑晶をかなり含有している。石基には柏子木状の斜長石、微粒の普通輝石、橄欖石、磁鉄鉱が認められ、橄欖石・紫蘇輝石・普通輝石玄武岩といえよう。ほど近くには見事な板状節理があり、節理面はN70°EからN70°Wに移化している。

(2) 逆戻りして、最初の停泊地小泊より反時計廻りに海岸線をたどると、海水中の凝灰質微粒砂質岩に角礫凝灰岩が被覆している。長与層群上部の平古場層との不整合ではなかるうか？

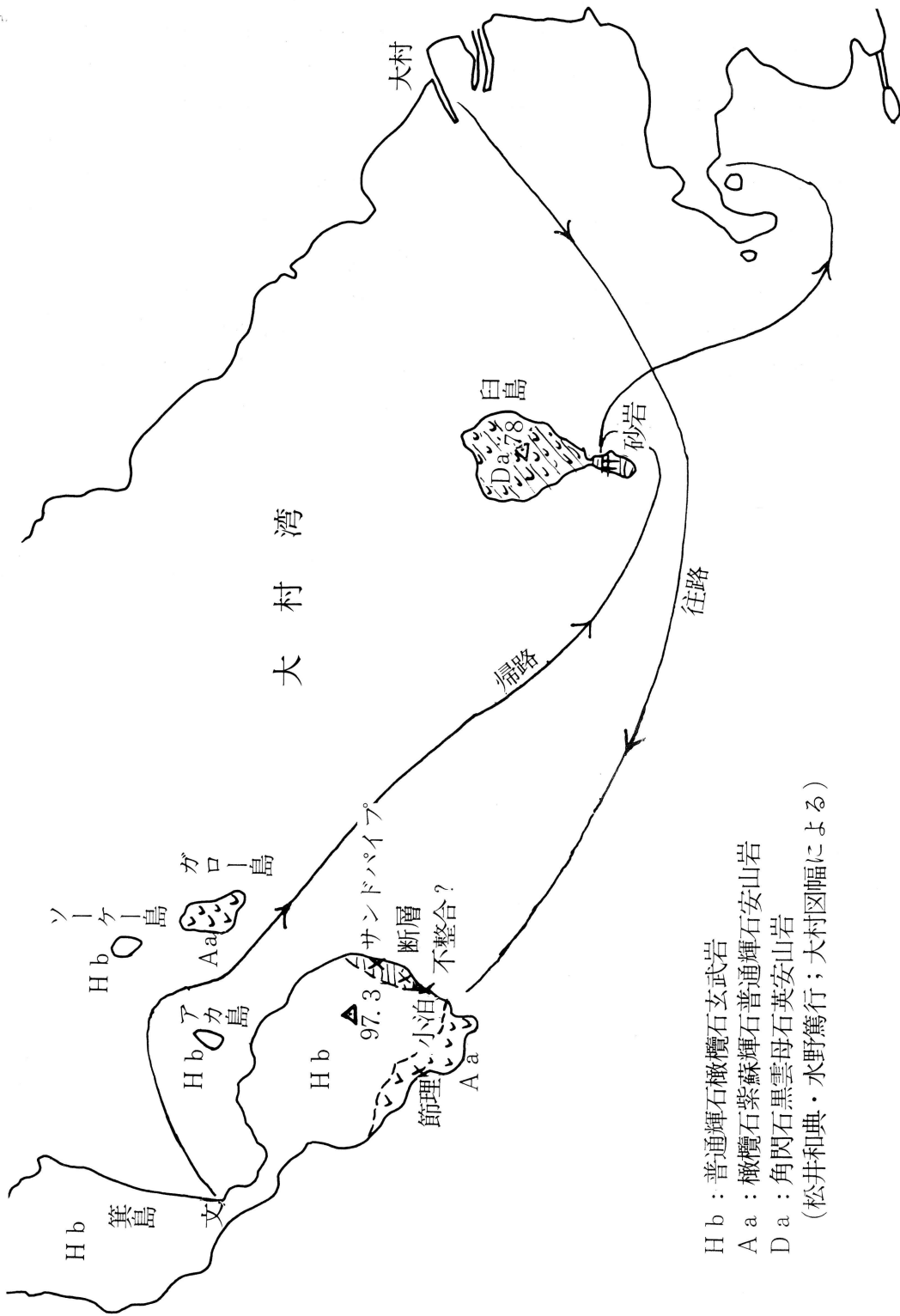
(3) さらに数100m歩いたところには、凝灰質を含んだ微粒砂岩に続いて中粒塊状灰白色砂岩があるが、その間の不連続面は明瞭でなく、むしろ判別に苦しむ擾乱帯である。いろいろ議論に花がさいたが、松井和典・水野篤行の「大村図幅」に指摘された、平古場層と諫早層群上部毛屋層の断層帯であろう。

時代的に非常に隔たりのある2層が、同一水準にあるのだから落差の大きい断層に違いないし、垂直崖でみられる小規模の断層とは全く異なった珍しいものである。

(4) 少し廻ると灰白色の中粒砂岩の中には、いたるところサンドパイプが見られ、教材用に大きな岩塊を採集している人もあった。

この頃になると、太陽も既に頭上にあり、誰いうことなく昼食となった。風のあたらぬ日だまりで、磯の香をかきながらの昼食も一興なものである。例により自己紹介、今後の巡検希望地などについて話しあう。

(5) 午後は東海岸を一巡。凝灰角礫岩あり砂岩あり、互におりなした複雑な地質である。凝灰角礫岩中には紡錘状の火山弾らしい岩塊もみられ、一種の集塊岩といえよう。その上部は箕島のほとんどを被覆している玄武岩である。また海岸線には海食崖もみられるが、この頃には満潮になり予定を変更して上の間道を経て小学校にでる。



H b : 普通輝石橄欖石玄武岩
 A a : 橄欖石紫蘇輝石普通輝石安山岩
 D a : 角閃石黑雲母石英安山岩
 (松井和典・水野篤行; 大村図幅による)

(6) 小学校うらの岩石を採集。肉眼的には灰濁色で1mmの輝石が変質している。鏡下では普通輝石橄欖石玄武岩である。普通輝石、橄欖石、短冊状の斜長石の斑晶がよくわかり、填間組織である。

学校で先日ガロウ島の採石場から運搬していた標本を配布。午後3時に小学校近くの波止場を出航し白島に向う。海面上には午後の小風のためか白波がころげている。船上から見る春霞の多良岳ものどかなものである。

(7) 15分程で白島に上陸し、南端の毛屋層をみる。走向N10°E、傾斜30°W、白色塊状中粒砂岩の中にクロスラミナの発達したと

ころもある。北部島の大部分は安山岩からできていて、第三紀層に岩脈状に進入した岩体であり、その接触部は擾乱されてあまりはつきりしない。岩質はかなり風化されてフレッシュなサンプルが得られないが、角閃石、黒雲母、石英安山岩である。斑晶の斜長石は累帯構造をしめしている。角閃石は変質している。石英もかなり認められた。

4時までおもしろい採集を終え乗船し帰途につく。西の空はあかね色に染まり、日が沈まんとしていた。

参加者 32名